振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第12回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2017

── Kobe University Homecoming Day 2017 ──

10/28(土)

神戸大学ホームカミングデイ2017

10:30～記念式典
於:出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)
12:00頃～ランチ・パーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。
第12回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

KOBE UNIVERSITY

文学部でのホームカミングデイは、午後から!!

誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2017

13:00～13:30	受付 **文学部 B棟132教室**
13:30～13:40	文学部長挨拶
13:40～14:50	**講演** **「開港150年―神戸の都市イメージの歴史的変容を考える―」** **奥村 弘 教授(日本史学)**
14:50～15:20	学生によるスピーチ
15:30～16:00	第11回文窓賞(学生レポートコンクール) 授賞式 及び受賞者スピーチ
16:00～16:20	文窓会総会
16:30～18:00	懇親会 瀧川記念学術交流会館 (参加費: 3,000円／当日)

＜併設企画＞ 12:50～16:30
(文学部 B棟132教室前)
教育研究プロジェクトの活動記録など

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ
http://www.kobe-u.biz/bunsokai/

「開港150年―神戸の都市イメージの歴史的変容を考える―」

講演者: 奥村 弘(日本史学 教授)プロフィール
神戸大学文学部卒業後、神戸大学大学院文化学研究科博士課程(社会文化専攻)単位取得退学。専門は日本近代史。
主な研究領域は、地域社会の形成のあり方の分析を中心とした、日本近代国家および近代社会の形成過程の特質の解明。この視点からの神戸市の形成史や「満洲国」における地方統治のあり方についても研究を展開。
(神戸大学大学院人文学研究科・文学部HP、教員紹介より)

＊第11回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(今年はぜひ、あなたも輪の中に!) 第11回文学部ホームカミングデイ2016(10月29日)の様子

今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!

文窓 ふみのまど

神戸大学文学部 同窓会 文窓会
事務局:〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
☎&FAX(078)806-7207
(月、水曜日の午後3時以降)
http://www.kobe-u.biz/bunsokai
文学部:☎(078)803-5595 FAX 078-803-5589
http://www.lit.kobe-u.ac.jp

15号
2017.9.30

特集／若い世代からのメッセージ

デキゴト 2016 ～ 2017

第 11 回文窓賞 2017 年 学生レポートコンクール結果速報!
文学部ホームカミングデイ 2017 [10 月 28 日(土)]

「実践型グローバル人材育成事業」の展開

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長　増本浩子

２年続けてお金の話をするようで恐縮ですが、文学部・人文学研究科はいわゆる概算要求予算を獲得することに成功し、今年度から33年度まで「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」を行うことになりました。今年度の配分額は1480万円で、部局の既定経費予算が約7360万円ですから、私たちにとっては大きな金額です。概算の予算規模は毎年少しずつ小さくなることが予想されますが、それでも５年間なにがしかのものが保証されており、これで一息つくことができます。部局長としての３年間の任期中に部局のためにすることのできた最大の貢献かもしれないと思っています。

「グローバル人材育成」は神戸大学の機能強化の柱のひとつで、文学部・人文学研究科は、「神戸オックスフォード日本学プログラム」（オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の２年生全員が文学部で１年間学ぶ、ユニット受け入れ型の教育プログラム）や、日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に採択された「国際共同による日本研究の革新―海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」事業などによって挙げた成果をもとに、日本語教育と日本研究に関わる部分で大学の機能強化に貢献することが求められています。

私たちは概算要求予算を使ってまず、「神戸オックスフォード日本学プログラム」のために働いてくれる優秀な若手研究者を雇用しました。このところお金と人はどんどん減らされていくのに仕事だけが増えて、教員の士気が低下していたのですが、これでしばらくはこのプログラムを安定的に継続していけるのではないかと思います。また、８月５日・６日の２日間、国際研究集会“New Perspectives in Japanese Studies”を開催しました。準備の期間が短かったにもかかわらず、「頭脳循環プログラム」の主要なパートナーだったオックスフォード大学、ヴェネツィア大学、ハンブルク大学の先生方が勢揃いし、非常に充実したイベントとなりました。事業期間中は毎年このような国際会議を開催し、その成果を論文集にまとめる予定です。その他にも、海外協定校と協力してさまざまなワークショップやシンポジウムが計画されています。何らかの形で日本に関係する研究がすべて「日本研究」に含まれるという解釈ですので、文学部のほぼすべての専修が関わることが可能ですし、経済学や法学といった社系部局との共同研究も期待できます。５年間で確実な成果を挙げ、次の概算や外部資金の獲得につなげていきたいと思っています。

「若い力」

文窓会会長　　16回生
武藤　美也子

同窓生の皆さま、この一年お変わりなくお過ごしでしょうか。去年も「暑い暑い夏が続いています」と書きましたが、今年は気温だけでなく、国際情勢も国内政治も混沌の状態の中にいます。トランプ大統領就任による米国の先の見えない混迷、核兵器開発に余念のない北朝鮮の金正恩、その二人に振り回されざるを得ない日本。今まで遠くにあった戦争が身近なものとして立ち上がってきた感のする今日この頃です。世界で唯一の原爆被爆国として、絶対に戦争への道を歩んではならないという国民としての意思を行動に移す時だと思います。

このような状況に正対させられているのが若者たちです。若者たちはどのようなことを考えているのか。同窓会長として現役の大学生と接し話す機会を得ることができていることはありがたいことです。若い年代の人たちと接するといろいろなことを教えられます。年代の違いをまざまざと感じさせられたり、全く違う視点からの考えに驚かされたり、また若さの素晴らしさに羨ましさを感じたり、これら全ては我々をリフレッシュさせ、活力を与えてくれます。

そこで皆さまにも同窓会フレッシュマンの声をお届けしようと思い、今回の「文窓（ふみのまど）」は若い世代の声を特集することにしました。

文窓会では毎年「文窓賞」という学生レポートコンクールを行っております。それに応募してくれた卒業生たちに声をかけました。新卒の学生で、企業に就職した者、院に進学して学問のさらなる研究に勤しむ者、教員として後進の育成に関わる者、総合大学から音大に進学した者、多岐に渡る後輩たちの今が綴られています。彼らは新しい環境に入り忙しい日々を送っているにもかかわらず、原稿依頼に対して、即座に快く受けてくれました。「このような形で母校と関わりを持つことができ、嬉しい限りです」とありました。このように同窓会が若い人とも繋がっていけたら、新しい同窓会への発展があるのではないかと思っています。

どうぞ、楽しみに我々後輩の文章を読んでみて下さい。また現役学生の「文窓賞優秀作品集」はHCD（ホームカミングデイ）の午後からの文学部企画行事の場で配布しております。また「文窓会」のホームページからも見ることができます。覗いてみて下さい。

ご報告です。2017年度から文学部の定員が115名から100名に削減されました。

（2017.08.14記）

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第11回 文窓賞 2017年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、また、なしえたもの、今考えていることについてレポートしてもらう（文窓賞）学生レポートコンテストに、今年は10作品の応募がありました。8月9日に選考会を行い、受賞作として、優秀賞1名と佳作3名が選ばれました。

■優秀賞　（賞金5万円と表彰状）

「神戸大学が一人の文学部生に与えたもの」

赤羽　佳奈子（国文学専修4回生）

「言葉を選ぶ能力を身につけ、多面的に物事を捉えられるようになること」が入学時の目標だった。就職を決めるにあたり、迷いながらも、著者は新聞社という自分を生かせる道を選んだ。情報があふれる現在、今までにも増して、言葉の大切さ、情報に惑わされず考える力が必要だと語る。同感だ。文章、構成も明確で、読み手にストレートに伝わる。

来年卒業し、これからが本番だ。信念に基づいて、しかし、時には、思い切りジャンプをし、枠を飛び越え、器を広げて大きく羽ばたいて欲しい。

佳　作（賞金1万円）

「自分に自信を持つこと」　上石田　菜穂（国文学専修2回生）

上岡竜太郎と一人の先輩に影響を受け、自信を持てない自分を変えようと決意をする。その決意を、塾の講師として生徒を指導する中で、試行錯誤しながら実践していく姿は、若者らしく清々しい。

「歩く魚と独り言」　神谷　茉音（哲学専修3回生）

魚や馬、猫、祖父を登場させながら、歩くとは？　生きるとは？　を思索する。哲学を学ぶ著者らしい特徴のある作品で、エッセイとして面白い。どう流転するのか、来年も作品を期待している。

「モスクワの夜」　山根　彩花（英米文学専修2回生）

文学部を選んだ私はどう進もうとしているのか、不安に揺れていた著者は、文学を学ぶ内に、特に、英語で小説を読むようになって、次第に自分の立ち位置を悟っていく。

選考を終えて

今回の10の応募作品には大きな特徴がある。文学部の意義は何か、そこで学ぶ自分とは何か、どこに向かうのかといった内面を思考する作品がほとんどであった。未来が以前にもまして不透明な昨今、「人間とは」といった基本的な問題に向き会う姿勢は、本来すべての人にとり必要だと考える。

文学的な言葉や表現に取り組む作品もいくつかみられた。これに対しては審査員の評価が分かれた。個人的には、自由に発想を巡らし、様々な表現を試みて欲しいと思う。しかし、充分にこなれておらず、形だけの場合は、上滑りになり、読者の心には響かないということを念頭に置いてもらいたい。

内面を深く考えることが第一義である。同時に、それを基に、外に向かって爆発し、行動・実践する作品も今後期待する。

（文責　審査委員長　西川京子）

選考委員
増本 浩子学部長　市澤 哲副学部長　白鳥 義彦副学部長　武藤 美也子　日高 健一　廣野 幸夫
西川 京子　吉田 浩次　田中 賢司　三宅 征彦　河島 真　坂本 直樹

卒業生それぞれが新しい世界で模索する自分らしい生き方とは――卒業してぶち当たった新しい世界、その中で大学生活を振り返り、自分を見つけ出そうとする姿は、どの世代にもフレッシュな刺激を与えてくれます。

「はなれる」、ということ。

植木　ゆりいか　2017年卒　英文学専修

「はなれる」という言葉を聞いて、みなさんはどのようなイメージを持つでしょうか。今回、「はなれる」ということについて社会人になって数ヶ月たった私が、ぼんやり考えていることをつらつらと書き連ねさせていただきます。最後までお付き合いいただけますと幸いです。

まず、自身にもう一度確認する意味も含めて、文学部とはなんたるかを、神戸大学文学部長の文章を引用したい。「人文学というのは、『人間とは何か』という問いに発して、その人間が長い歴史の中で作り出してきた文化や社会の諸相をとらえようとする学問です。つまり、人文学は人間にとって最も根源的な問いを扱う学問であり、その意味ですべての学問の基礎となる学問であるとも言えるでしょう」そうだったのか。なんだか、わたしみたいな人間が所属していたというには偉大すぎる学問である。すぐに使える実学を大学では学ぶべきだとか国の偉い人たちが近頃声高に叫んでいるために、文学部は肩身の狭い思いをしているという話をよくきいたものだが、実学ってなんだ。すぐに使えるってなんなんだとわたしは言いたい。目の前にある仕事を早くこなすことが出来たってそれがなんだというのだと、思わずにはいられない。と、このように私は一つのことを考えているそばから、話がいろんな方向に飛んでいくので、その際には「またか」と、にやっとしながら読んでいただけることを願う。何を言いたかったのかというと、私は何をやっているのかよく分からない文学部が好きで、ここで学んだこと、出会った人々を誇りに思っているし、より多くの人が同じように思っていて欲しいということであり、それは私の願いでもある。

わたしは、分かりやすすぎるものは嫌いだ。まずベストセラーの本は大抵嫌いである。たしかに読後はすっきりするのだが、何も心に残らない本が多いという話を先日も大学時代の友人と話していた。反対に全く分からなくても、なんだかこれは読まないといけない気がする…という気持ちにさせる文章も存在する。内容はあまり覚えていないのに、ある言葉がひっかかっていて、ある時ストンとその言葉の意味が分かったりする。そんな文章に出会えた時わたしはものすごく嬉しくなる。とびはねたいような、そんな気持ちになる。それでは、具体的にはどんな著者が好きかと言われれば、内田樹さんの本が好きだ。どこかの本で「内田樹は文章が下手だ。結局なにを言いたいのか分からん」と批評されていたけれども、内田さんの書く文章は、思考回路を覗いているようで楽しいと思う。ああ、こう考えて、こうなって、そう落ち着くのか!といった風な軌跡が追いやすいのだ。そして彼の文章にはいつも不思議な距離感と、突き放しと、優しさがあるのだ。近すぎない、でも遠すぎない心地よい距離感だ。全然何を言っているのか分からない時もあるけれど（それはわたしの理解力が足りないだけで、いつか来るはずの「ストン」を心待ちにしている）。

次に、「働く」ということの目的について、ちょっと「はなれて」考えてみたい。何の本だったか失念してしまったが、社会人になってから、こうはならないように生きたいと思ったのを覚えている。たしか主人公の男性は家で仕事をしており、彼女は会社で忙しく働いていた。彼女は休日には取り憑かれたように外に出かけ、ショッピングばかりする。彼は彼女に聞く、「何故そんなに疲れるのに、会社であくせく働いて、休日には買い物ばかりしているの？」と。彼女は答える、「こうやって休日に買い物をするために働いているの!」と。わたしはこの話を恐ろしいと思った。考えてみて欲しいのだが、本当に彼女は買い物をするために働いているのか？（というか、それでいいのか？）という点である。働く→ストレスがたまる→買い物でストレスを発散→お金がなくなる→働く…消費社会の縮図のようで憂鬱になる。「好きな仕事をしなさい」なんて、決してわたしが言えることではないが、何のために働くかはある程度自分で意味を見出していたほうがいいのではないか。そういうわたしもまだ自分の働く意義を明確に見つけられていないわけだが、組織や地域に、なんらかのいい効果を還元できればいいな、なんて思っている。すぐ効果が目に見えるわけじゃないし、定量化できないから難しいが、関わる人たちがちょっとでも生きやすくなる手伝いができたらいいと思っている。わたしはある会社で運良く希望していた人事関係の仕事に就けたので、日々の仕事をこなしながら、誰かが生きやすくなったらいいなあなんて思っている。

家族と、「はなれる」ことについて書く。最近、祖母がめっきり弱ってしまった。両親が共働きだったこともあって、小さい頃家でおばあちゃんと過ごした時間はとても多かった。わたしが変な顔や、踊りをするとおばあちゃんは「その顔になっちゃうから辞めなさい」と飽きずに叱ったり、時には一緒になって変な踊りをしてくれたものだ。1年前は普通に車も運転していたのだが、ある日転んで腰を悪くしてから急に動けなくなって、病気になってしまった。あんなに元気だったのに、会うたびに同じ人物ではないように急激に弱く、小さくなっていく。わたしに出来ることは、病院に行ってひたすら話しかけるしかない。時々弱々しく笑ってくれるおばあちゃんを見て、苦しくなる。病院からの帰り道、未だに家に帰ったらおばあちゃんが「おかえり」と言って迎えてくれて、一緒に変な踊りをしてくれないかと思ったりしてしまう。とにかく、なるべく病院に通って、一緒に時を過ごそうと思う。今となっては、おばあちゃんがちゃんとわたしを認識してくれているのかも定かではない。生きるとは、大切な誰かを思い、その人と過ごすことなのかもしれない。すると、どうしてわたしは家族とはなれ、ここにいるのだろうか、とも思う。でも分からない。ただ、わたしはそれなりに年を重ねたのだなあとぼんやり思うのだ。

わたしも早23歳である。小学生の時には、もう結婚していると思っていたし、将来の夢は、「お嫁さん」と書いていたのではないか（なぜか大工さんと書いていたが、どうしてかは謎だ。変な子供だったのであろう）。言いたいことは、小学生のときは、23歳ってもっと成熟した大人だと思っていたということだ。今となっては、両親だってまわりの大人だってただの人間で、悪いところも良いところもどっちもあって、みんな孤独で、弱いってことがよく分かる。それでもみんななんとか生きているんだなあなんて、時々考えたりしている。いつか幸せになれるはずだと信じているし、その前に二日に一回ぐらい幸せだなあと感じていたり、逆に寂しすぎてお酒に甘えていたりする。ギフトという本だったと思うが、「人は疲れすぎてはいけない。心を許している誰かをつい傷つけてしまうから」とかそんな言葉があった。そばにいてくれて当然と思ってしまい、失った時にしか気付きにくいものだが、時々は今あるものに感謝して、「有難う」つまり、存在していることそれ自体が難しいのだという「ありがとう」の気持ちをもって、ちゃんと伝えようと思う（日本語の「ありがとう」という言葉は語源からして素敵だ）。

最後に、文学部で学んだことを一言でいうと、「『はなれて』考えるということ」を学んだのではないかと思う。『旅をする木』という本で、「二十代のはじめ、親友の山での遭難を通して、人間の一生がいかに短いものなのか、そしてある日突然断ち切られるものなのかをぼくは感じとった。私たちは、カレンダーや時計の針で刻まれた時間に生きているのではなく、もっと漠然として、脆い、それぞれの生命の時間を生きていることを教えてくれた」という文章があった。生きていくのに大切なことは、視野が狭まりそうになったときに、例えば選択肢が二つしかないように見えても、実はそうではないことを忘れないことだと思う。世間が、そんなに大きい範囲でなくても、例えば会社のチームのメンバーがこれは二つに一つだ!なんて言い出したり、大多数が一つの方向に盲目的に向かおうとしているときに、ふと立ち止まって、「そうだろうか。もうちょっと他の方向があるんじゃないかな」って言える人間でありたいと思うのである。ときに「はなれ」ながら、そんなふうに、生きていきたい。

筆者（左）、文学部時代の友人と北海道旅行中

「生徒へ伝えたいこと」

斉賀　万智 兵庫県立高等学校教諭　2014年国文学専修卒業（2016年博士課程前期課程修了）

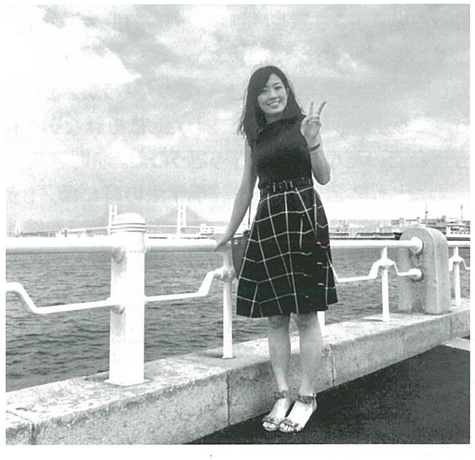
昨年の四月から教職に就き、はや一年半が過ぎた。昨今、教育を取り巻く話題は決して明るいものばかりではないが、私の勤務する現場は、賑やかな笑い声が響きあい、学業や部活動に真摯に向き合う子どもたちの活力と熱気であふれている。このような光景を見ていると、どれほど大変なことに直面していても、自然と笑顔がこぼれてしまうから不思議である。改めて、子どもには何か秘められた力があるのだと実感させられる毎日である。

いま、教壇に立ち、この神戸大学で学んできたことをどれほど学校現場に還元することができているのかといえば、甚だ心許ない。しかし、生徒たちに伝えたいことは、おぼろげながらも自分の中に確実にある。それを上手く表現できるかどうかは不安だが、この機会に少し書いてみようと思う。

私がこの神戸大学で学んだことは計り知れないが、一つ実感を持って心に留めているのは、「関係のないことを証明するのは難しい」という事実である。例えば、私は中世の軍記物語を専攻していたため、鎌倉や室町期に記された日記等の記録類を紐解く機会が多くあったが、その際、特定の人物の名が幾度となく記されていれば、「あ、この日記の筆者は、この人物と余程関係が深かったのだな」などと推測することができた。しかし、日記に名が登場していない人物についてはどうであろうか。日記に名が見えていないからといって、関係がなかったと断言することはできるだろうか。このように、関係があることは証明することができても、関係のないことを証明するのは困難を極めるのである。このことは、今思えば当然かもしれないが、当時の私に新たな光を灯してくれた視点であり、また、文脈は違えども、学校生活などの日常に少なからず示唆を与えてくれるものでもあると思っている。

いま、高校生は人生の選択を迫られている。理系に進むか、それとも文系か。あるいは、どの学部へ進むのか。どれも今後の人生を大きく左右する重要な選択であるがゆえに、常に慎重さと緊張感がつきまとう。その選択の基準となるものは人それぞれのようだが、生徒と話していて気にかかるのは、「役に立つかどうか」という観点で人生の選択を行う生徒が少なくないことである。この背景には、「実学」や「実用性」を重んじるような社会情勢があるものと考えられるが、果たして、高校生の時点で、何が自分の役に立ち、何が役に立たないなどわかるのだろうか。そこには、自分の独りよがりな思考や単純かつ画一的な判断しか存在していないのではなかろうか。関係のないことを証明するのが難しいのと同様、役に立たないことを証明するのも難しいのである。さらに、そのような選択には、「興味」や「好奇心」などという人を根底から突き動かし、一つの目標へと一心に向かわせる原動力が欠如しているように思われる。何事においても「興味」「好奇心」がなければ、もっと知りたいという貪欲さが生じず、その先の成長はないのではなかろうか。いま思い返せば、文学部の友人たちは、自分の「興味」や「好奇心」の向く方向が明確であったと感じる。皆、純粋な「興味」や「好奇心」に動かされて文学部へ入学し、それぞれの「興味」や「好奇心」の空白を満たすべく、研究に没頭していたのだろう。そんな友人たちの話は魅力的であり、彼らと交わした議論の数々は、今も私の思考を支えてくれるものである。

ここまでとりとめもなく記してきたことは、理想論かもしれないが、やはり生徒たちには、特定の価値観に囚われず、自らの「興味」や「好奇心」に則った選択をしてほしいと願う。それこそが、生徒自らの個性を伸ばすことであると信じ、私も個々の「興味」や「好奇心」を尊重する指導をしていきたいと心から思っている。



「生きる方向」

楠本　雅司 2017年卒　日本史学専修

こんにちは。昨年度卒業生の楠本雅司と申します。卒業してから半年が経とうとしているのですが、毎日仕事に忙殺され、学生時代が遠い過去のように感じております。皆様はいかがお過ごしでしょうか。

私は現在、滋賀の県立高校で教員をしており、1年生の地理、2年生の世界史の授業を担当しています。私の勤務校はなかなか「パンチの効いた」学校でして、授業のチャイムがなると、廊下で走り回る生徒を教室に入れ、ピアスやイヤホンを外させ、制服をきちんと着させ、教科書やノートを机上に出させる。この間に50分の授業のうち最低10分はかかってしまいます。加えて私は校務分掌で生徒指導を担当しており、毎日煙草の紫煙と爆音の音楽の中校内をパトロールしたり、問題行動を起こした生徒の事情聴取をしたり、時には取っ組み合いの中に割って入ったりすることもあります。また、部活動では女子バスケットボール部の主顧問を担当していますが、この学校では部活動もなかなかままならず、バスケ未経験の1年生5人のみの小さな部活でひっそりと練習しています。彼女たちはバスケのことよりも人間関係でもめてばかりで、「女の子は難しいな…」と日々頭を悩ませております。

夏休みまでの授業を振り返って、大学での学びを日々の授業に活かせているかな？と振り返ってみましたが、恥ずかしながら生徒を50分イスに座らせて前を向いて授業を受けさせることが精一杯で、今のところ「これが今に活きている!」と胸を張って言えることはありません。ですが、たまに生徒から「先生は大学で何勉強してたん？」と聞かれることがあり、卒論の内容などをすごくかいつまんで説明してみると、「なんかよく分からんけど面白そうやな!」と言われることがあります。自分で必死に調べ、考え、研究したことは、彼ら生徒にも熱量は伝わるのだな、と実感しました。今はまだまだ授業を成り立たせることに必死ですが、少しずつ、自分の学んできたこと、やってきたことを生徒の学びに活かせる授業を作っていきたいと考えております。

さて、約半年この学校に勤め生徒たちと過ごす中で、彼らの「生きる方向」について考えたことがあります。自分が高校生のころを振り返ると、「こんな大人になりたい!」「こんな職業に就きたい!」といった強い思いは無いとしても、「なんとなく大学に行って、卒業して、仕事に就いて、家庭を持つんだろうな」とぼんやりとした人生のレールを感じており、そこから逸れないように今日も学校に行き、授業を受け、部活動に取り組み、明日の宿題をこなしていました。皆様の中にもそのような方も多いのではないでしょうか。しかし、私が接している生徒たちはそうではありません。彼らの多くは自分がどんな大人になっているかはおろか、1週間後、明日の自分の姿すらわかっていません。そんな彼らが今、この瞬間さえ楽しければ良い、と問題行動を起こしてしまう気持ちも理解できます。どちらかの生き方が優れているとは思いません。しかしやはり私は、彼らが高校生のうちに漠然とでもよいので自分の生き方を見つけ、高校を卒業する際に「次はこれに向かってこれを頑張る!」と自分の「生きる方向」を見つけて旅立って行って欲しいと思います。（まずは「卒業する」ことが大きな目標の生徒も多くいますが…。）そして思い返せば、私の「生きる方向」も、決して自分一人で見つけたわけではなく、周囲の人との関わりの中で形成されたものでした。神戸大学文学部の魅力溢れる同級生や先輩、後輩との交流の中で「こんな考え方もあるのか」と気づかされたり、お世話になった先生方から「学ぶとは、考えるとはどういうことか」のヒントを教わったりする中で、私なりの「こういう生き方がしたい」という人間像が定まってきたように思います。私個人が生徒に教え、導けることなど限られていると思います。私は、彼らが豊かな人間関係の中でいろいろなことを感じ、発見することのできる環境作りにどう貢献できるか、ということをテーマとして今後の教員生活に邁進していきたいと考えております。

日々の校務と慣れない一人暮らしにふらふらになりながら、ふと「あいつはどうしてるかな」とかつての学友のことを思い出します。皆さん気が向いたら土日に飲みにでも誘ってください。

新たなるスタート ～六甲から上野へ～

伊石 昂平 2017年卒 西洋史専修

2017年夏、僕は「上野の森」にいる。4年間慣れ親しんだ六甲の麓に別れを告げ、第二のステージに踏み出した。4年前、文窓会の学生レポートで自身の思いを綴ったことを機に、毎年このレポートを僕自身が自問するための記録にしようと思っていたのだが、多事にかまけて書かぬまま、いつの間にか時が経過してしまった。ありがたいことに、この度『文窓』にて改めて自問の機会を与えていただけたので、上野に至るまでを少しばかり振り返ってみようと思う。

神戸の4年間はあっという間だった。振り返るとなんとも忙しい日々だったと思う。しかし文学部に入学した当初の僕は、「とりあえず神大文学部生」だった。何がしたいのか、何を得るべきなのか、何をしにここへ来たのか、ヴィジョンがまるでないまま、ただ六甲の自然や神戸の街並みに魅力を感じ、空き時間はひたすら神戸散策に耽っていた。

僕は4歳の頃から18年間チェロを続けている。一言でチェロを続けていると言っても、技術習得には長い年月と日々の努力が必要である。僕は学業とチェロを何とか両立させながら大学受験を乗り切り、無事大学生になったことで学業にある程度の達成感を感じていた。本来ならばこれからが大切であり、そうであってはならないのだが、その時点では学業と音楽を天秤にかけると、明らかに音楽の方が停滞していた。そのために僕は音楽に時間を費やした。そうなると学業に手が回らなくなる。これは昔から僕にとって頭の痛い問題で、大学生になってもその問題は解決できない状態が続いた。しかし、音楽をしに神大へ来たわけではない。「神大へ来たことには意味がある、ここで何かを得たい」と感じていた。

日々大学へ通いながら、プライベートでは多くの方々に演奏のお誘いをいただき、また、自身の技術向上のためにコンクールや講習会などに参加し、今自分ができる音楽活動を精一杯こなす中で、徐々に音楽と史学に共通点を見出すようになった。僕は昔から世界史が好きだった。中でも西洋史に特に興味があったので、迷わず西洋史専修に進んだ。一方で、当時僕はロシアの作曲家の作品を好んで弾いており、演奏を続ける中で圧政に苦しんだソ連の作曲家ショスタコーヴィチに興味を持つようになった。そして卒業論文はソ連の文化政策と彼の生涯に焦点を当てて書くことにした。

時が経つのは早く、気が付くと周りの学生は就活を始めていた。僕自身も、就職して社会人となり、今までのように仕事と音楽を両立させることも考えた。そうすれば、両親もさぞ安堵するであろう。しかし僕は専門的に音楽を学んでみたいという気持ちを心の中でずっと抱いていた。このままではアマチュア演奏家で終わってしまう。僕と同年代であっても既に活躍している人も多く、僕は大きく後れを取っていた。だが今ならまだ間に合う、これからの長い人生の中で、音楽を学べる時間は今しかない、と思った。そして東京藝術大学の大学院を目指すことを決心した。

藝大大学院の受験は一般大学の僕にとって非常に厳しいものだった。音楽に関する大学レベルの知識と技量が求められる上に、内部生でも受からない事がしばしばあるため、僕は院浪覚悟で挑戦することにした。試験科目は実技と音楽史と英語。英語は何とかなるとして、問題は演奏と音楽史だった。ここで、西洋史専修で学んだことが大いに役立つこととなる。実技の課題曲はいくつかあり、僕はそこからショスタコーヴィチのチェロ協奏曲を選んだ。僕の好きな作曲家であり、卒業論文でも彼を取り上げている。卒論を推敲していく中で、ショスタコーヴィチや音楽史についてより多くの知識を得ることができた僕は、今まで以上に完成度の高い演奏ができるようになった。こうして院試を迎え、無事合格することができた。

今、藝大では演奏中心の生活を送っており、オーケストラ、室内楽、ソロなど、望めばいくらでもその機会を与えてもらえる。優れた音楽家も多く、日々素晴らしい演奏を耳にし、刺激を受けながら研鑽を積んでいる。回り道をしたと思う人もいるだろうが、神戸大学へ進んだことにより、より多くの知識と視野を持ち、他の人たちとは異なる視点で音楽を見つめることができるようになった。神戸大学で得たことを藝大で具体的にどう生かせるか、今はまだ漠然としているが、何かしら結果を出すことができた折りには、改めて是非『文窓』にて報告させていただきたいと思う。

「ファーストペンギンになる」

木村 薫 2017年卒 フランス文学専修、博士課程前期課程一回生

今春より大学院へと進学したものの、学部時代と相も変わらず毎日フランス語と対峙しています。変わったことといえば、大学という「箱」ではなくその「中身」。優秀であった同級生や先輩方の卒業に伴って訪れた唯一の現役院生という立場。自分がこんなに無力であることを感じたことはいまだかつてありませんでした。

学部のころは、一学年6人までという少人数体制の中でいかに滞りなく授業をこなしていくかに命を懸け、ゼミの3年間を駆け抜けました。好奇心の塊だったわたしは、手を出せるものすべてに手を出していて何もかも為し得ずに手に余る仕事量にただただ翻弄されていたように思います。まわりのために遠慮をして自分を「犠牲」にする、当時のわたしにはそんな言葉がお似合いだったかもしれません。いくらでも代わりのきく誰かの人生を生きてきたかのようです。もちろん、この括弧つき「犠牲」に意味がなかったというわけではありません。なにかに必死になり忙しくしているときにこそ捗ることもあります。時間と時間の合間を縫ってできる語学、日常的な何気ない課題。そしてなにより追われているということに対する満足感がその状態からわたし自身を一向に解放しませんでした。忙しいと心が亡くなるとはよくいったものです。いろんなことを引き受けるあまり、わたしは自分の心を失っていたように思います。本当にやりたいことを見出すことができるのは自分自身だけ。今年にはいってようやく時間と向き合うのに十分な時間ができ、わたしはそこにフランス留学という道を見出すに至りました。

研究のために、というのがもちろん一番の目的です。外国語文学を学んでいる以上、日本で学べないことがあるのは疑いようもないことでしょう。しかしそれだけではなく、いまのわたしには紙面上でだけではなく現実に結びついた言葉を感じ取ることが不可欠に思われた、ということもあります。

留学生の友人たちとの共通言語は基本的には英語。フランス人の友人とはフランス語で話せばいいけれど、他の国々なら普通は英語になってしまう。こんなとき、わたしは笑顔の張り付いたかかしのようになります。飛び出てくるはずの言葉は喉まででかかり、わたしの舌先に留まる。まるで海に飛びこむのを怖がるペンギンたちのように。「聞こえるし、わかる。ただし話せない」それが他人事ではないという現状。わたしは恥ずかしいことに中学校の頃からずっとこの問題を抱え続けてきたのでした。しかし、留学生たちを見ていると、日本から一歩外へ出ればこれだけ学んでいて話せないということの方が異常なのだと感じます。

わたしは学部時代に専修のフランス文学の授業を受ける傍ら、英語科の教員免許を取得しました。中学、高校のころから得意だった英語。手元に免許があっても、いまのわたしに教える権利などない。しかし、英語を話せない日本人を生み出し続けるサイクルに歯止めをかけなくてはならない、そう思います。普通に勉強していて、皆がみな話せないとなると何かしらアプローチに問題があるのでしょう。英語を外国語として教えるフランスへ留学する機会を通して、わたしなりの解決策を見出したいと考えています。

今度はどこにもいない誰かのためではなく、自らのための「犠牲」となる。日本とは全く時間の流れの違う国に身を置いての、今夏からの一年間。わたしの中の恐れおののくペンギンたちを押しのけて、わたしは新たな地へと漕ぎ出すファーストペンギンになることを決意しました。

寄　稿

文窓に寄せて

塚本　京平　2010年卒　社会学専修　びわ湖放送報道部

2015年の4月に地元の滋賀県へと戻ってきました。高校を卒業して以来のことです。

神戸大学文学部を卒業した後、岩手県のテレビ朝日系列局・岩手朝日テレビで、5年間報道系のアナウンサーとして働いていました。社会人1年目が終わろうとする2011年の3月に東日本大震災が発生。それからは被災の中心となった沿岸部を含め、ずっと報道現場の最前線にいました。さまざまな現場で災害の恐ろしさをいつも見せつけられながら、少しでも被災した人に寄り添えるよう取材を続けてきたつもりです。

一方で、岩手県で過ごす期間が長くなるほど、地元への思いも膨らんでいきました。東日本大震災のような地震・津波だけではなく、台風や集中豪雨、土砂災害に河川のはん濫、火山の噴火…日本全国、いつどこで災害に遭うかはわかりません。地元で何かがあったときに、自分に何ができるのだろうか。地元で生まれた人間だからこそ、自分にしか伝えられないものがあるのではないか。いろいろと頭をよぎったときには、滋賀県に戻ることを考え始めていました。

「海なし県の滋賀では津波の可能性こそほとんどないが、岩手で経験した被災地取材は、必ず役に立つと思っている」。こんな話をしているうちに、びわ湖放送報道部では災害担当を務めることになっていました。現在は、社内の緊急マニュアル作りなどを進めています。滋賀県は災害、特に地震の少ない自治体です。過去10年で発生した震度4以上の地震は2回しかなく、これは47都道府県で最も少ない数です。厳しい言い方で「平和ボケをしている」と表現されることもあります。緊急時の対策はまだまだ不十分ですが、それは住民、行政だけでなく報道機関も同様でした。緊急時に何を県民に伝えるべきか。私もまだまだ不勉強ですが、福島や岩手への出張も重ねて先例を学び、少しずつ知識を溜めているところです。

さて、2016年に発生した熊本地震では、地震対応の重要性を痛感するだけでなく、メディアによる災害報道の在り方が問われました。避難所取材や危険な場所での撮影が問題視され、「報道などいらない」という意見も耳にしたことがあります。メディアにいる人間としては耳の痛い話です。しかし、「別の会社のことだ」と聞き流してしまうと、私自身が第2、第3の事例になってしまう可能性も十分にあります。スクープがほしいために無謀な行動を起こすと、メディアの取材は凶器になりかねません。今こそメディア自身が自分たちの姿勢をもう一度考えるべきです。

それでも災害報道は必要です。東日本大震災で発生した、あの黒く、大きく、激しい津波の映像。きっと皆さんの頭に残っていると思います。もう一度大きな地震が起きた時、海の近くに住む人はその映像を思い出すでしょう。次に何かが起こった時に、命を落とす人が1人でも減ってほしい。だからこそ、災害に遭った場所がどれだけ大変かを伝える必要があるのです。津波だけではありません。火事や事故が発生するたびに、私たちは激しい炎や壊れた車の映像を全国ネットで何度も流します。被害に遭った人に寄り添う気持ちを忘れてはいけませんが、私たちはスクープ映像がほしいために取材をしているのではなく、事例を人の心に残すために動き回っているのです。ニュースを見た人が1人でも「火は怖い」、「事故は怖い」と思い、毎日心掛けてもらうだけで放送した意味はあると思います。メディアによる取材の裏側には、記者1人ひとりの思いがあることを忘れないでください。

重たい話が続きました。もちろん滋賀県で行う日々の取材活動の中心は、災害報道だけではありません。地元の催しやスポーツなども追いかけています。滋賀県で高校までの18年を過ごしていたとはいえ、大津市以外の場所は正直なところよくわかっておらず、毎日の活動で新しく知ることばかりです。「地元」という言葉の定義を自分の中で良い意味であいまいにしつつ、取材で滋賀の知識をこっそり増やしています。「滋賀のことは何でもわかる」と言えるのは何年後になるかわかりませんが、昔の知識と取材内容を結び付けながら日々勉強していきます。系列局から独立局へと移籍し、滋賀以外の皆さまにお目にかかる機会はぐっと減りましたが、地に足を着けて日々の取材を続けていきたいと思います。

デキゴト 2016~2017

11/5　石井敬子准教授が平成28年度日本心理学会国際賞（奨励賞）を受賞

石井准教授（人文学研究科知識システム論コース・心理学）は、社会・文化心理学の立場から一貫して文化と認識の問題に取り組んでいます。その成果は国際誌に数多く公表され、また欧米等の研究者とともに文化と認識に関するさまざまな国際比較のプロジェクトを実施。精力的な活動が国際的に高く評価されています。

1/23　全学英語エッセイコンテストKUEECで竹下千晶さん（国文2年生）が優秀賞を受賞

神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターでは、全学英語プレゼンテーションコンテストKUEPCONと、全学英語エッセイコンテストKUEECを実施しています。そのうちエッセイコンテストで、国文・2年（当時）の竹下千晶さんが優秀賞を受賞（最優秀賞は該当者なし）。ちなみに同コンテストは、神戸スタンダードに掲げられた「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」の向上を目的とするもので、昨年度の課題「神戸大学の英語教育をどう改善するか」に独自の提案を構想して英語で発表。延べ13名の参加者から、厳正な審査で決定されました。

3/24　平成28年度卒業生、卒業おめでとう！文窓会主催 卒業記念ウェルカムパーティーを開催

文窓会主催の神戸大学文学部・大学院「卒業・修了祝賀会」が3月24日午後2時半から「LANS BOX」2階で開催されました。午前10時半からの「学位授与式」（神戸ポートアイランドホール）を終えた卒業生たちは、最高の笑顔で参加。司会進行は39回生の河島先生が務め、軽妙なリードに、場は自然に和んでいきました。

はじめに、武藤文窓会会長があいさつ。「私が16回生です。」と切り出すと、場内から「おーっ」となんともいえない歓声が上がりました。そして「皆さんは世界中に羽ばたかれるとは思いますが、縁を切らないように、「文窓（ふみのまど）」が追いかけて行きます」と、きずなを強調。続いて、増本文学部長が、去年から暗い話をしているんです」と、卒業生の心を捕らえました。「待ち受けている世界はバラ色ではない。命を大事にして下さい」本当に心に響く言葉だった思います。

新幹事の選任からチョコレートの抽選、先生方からのひと言もあって、楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。当日の参加者は130人。秋のホームカミングデイには、ぜひ歓談の場を持ちたいものです。（文責：三宅）写真P12

4/19　学びの進路を探りたい！新入生歓迎ティーパーティーを実施

今年は少し早めの4月19日、恒例の文窓会主催「新入生歓迎パーティー」が開催されました。武藤文窓会会長と増本人文学研究科長にお言葉をいただき、先生方の紹介を経て、立食パーティーのスタート。新入生同士、軽食をつまみながら歓談し交流を深めます。

その後、新入生たちは専修ごとに分かれ、先生を囲んで専門分野のお話を熱心に伺いました。入学してまだ1ヶ月も経っていないからでしょうか。心なしか会場全体が静かで、新入生たちは黙って大人しく先生の話に聞き入っている様子です。

気になったのは「壁の花」の存在でした。どのテーブルにも着こうとせず、会場の隅でただ立ち尽くし、様子を伺っている学生が複数います。話し合いに加わるよう促しても「はい、でも…」とか「途中からでは話がわからないし…」などと言って立ったままです。しばらくして気づくと、彼らの姿はありませんでした。

そんな態度に対し、「覇気がない」とか「消極的だ」などという言葉が口を衝いて出てきそうになるのですが、ここは文学部。一見ネガティブな評価を受けそうな考えや言動も、長い目で見れば、本人たちの思索の糧となり行動の指針となることを私たちは知っています。話し合いの輪に加わることなく立ち去った新入生にも、陰ながらエールを送ることにしましょう。（文責：坂本）写真P13

7/12　オックスフォード生と留学生のインターナショナルアワー

オックスフォード生を中心に留学生がBBQパーティに集いました。写真P13

8/7　国際色ゆたかにKOJSP第5期生の修了発表会と修了式を挙行

神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）第5期生の修了発表会と修了式が、8月7日（月）午後、文学部B231教室で行われました。このプログラムはオックスフォード大学東洋学部日本学専攻の2年生が神戸大学文学部で特別聴講生として1年間学ぶもので、今回で5年目となります。

当日は気象警報発令のため残念ながら規模は縮小されましたが、それでも多くの関係者が集う中、第5期生の7人が日本の古典、伝統、アニメ、文学、信仰などに関する研究発表を行いました。

今回の発表会・修了会には、オックスフォード大学のビャーケ・フレレスビッグ教授のほか、ヴェネツィア大学のボナヴェントゥーラ・ルペルティ教授、ハンブルク大学のヨールグ・グヴェンツアー教授も参加されました。また、3年前に修了した第2期生のティナ・ウォルシュさんも駆けつけてくださり、例年にも増して国際色豊かなものとなりました。（文責：河島）写真P13

国文16回生東京文学散歩（5/31～6/1）

国文16回生は、昭和43年卒業で50年を経て現在12名。自然体の人あり、歳に抗う人あり色々ですが、年一回の旅行を楽しんでいます。

学生の時には、友のことをそんなに知りませんでしたが、卒業後間もなく家庭に入った私にとって、多くの友は社会で経験を積み、勉強をしてこられた尊敬できる方ばかりです。

今までに白浜、美ヶ原、白骨温泉、長野県上田、姫路城、金沢と、毎年お世話をする人が変わり続いてきました。

白浜では、有名な南方熊楠に出逢い、伊藤若冲の濃厚な鶏の絵もどこかで見ました。美ヶ原の山本小屋ふるさと館は料理がおいしく、イベントで土星を見たり、高原に集まる動物を見に行くナイトサファリがあったり、朝は王ガ鼻へ行って雲海の展望を楽しみました。

今年は千葉のＮさんが「東京文学散歩」に関する資料をいろいろ集めて準備してくれていましたが、残念なことに亡くなられてしまいました。

それで、私達は東京で偲ぶ会を開き、Ｎさんが遺した資料に基づき東京文学散歩をすることにしました。下見はＳさんとＮさんのご夫君（ここからＫさん）がしてくださいました。この夫のＫさんも神大の方で、一期上の方です。

旅行の当日は、関西からの８名は新幹線の中からもう同窓会です。

東京駅で他の２人とＫさんと合流して、四谷の聖イグナチオ教会で友へのお参りをしました。心洗われる音楽に包まれた荘厳な教会でした。

その後、加賀藩前田家上屋敷の正門だったという赤門、漱石の「三四郎」の舞台になった三四郎池、東大医学部のインターン制度改善要求に端を発した紛争の場の安田講堂など、色々想いを巡らせながら東大を散策しました。

次に観潮楼跡に建つ鴎外記念館を訪れ、文学者としてだけではなく、軍医、評論家、翻訳家として各分野で活躍した鴎外の足跡を辿りました。

その夜の宿泊は水月ホテル鴎外荘です。敷地内には「舞姫」を執筆した彼の旧居が保存され、そこは公開されており、食事会を開くこともできます。また都内第１号認定の天然温泉もあるのです。庭には鴎外が愛した多くの草花が植えられ、しっとりと美しく国文卒の私たちにふさわしい宿でした。

夜の食事の時、Ｋさんが在りし日のＮさんの様子を話してくださり、私たちも彼女を思い出し、涙ぐんでしまいました。

その後Ｋさんは、私達が行ったこともない銀座のスナックに招待してくださいました。そこには文藝春秋で長年にわたり編集をしてこられた友人のＯさんを呼んで下さっていました。その方から、編集の裏話など興味深い話をたくさん聞くことができました。

「編集者は作家の才能を見いだし、ほれ込み、ずっと寄り添っていくことが大切です」とお話になり、一つの例として古川薫氏のことを教えてくださいました。直木賞の候補に９回選出されながら落ち続けて、25年目に「漂泊者のアリア」でようやく受賞されて、二人で泣いたという話にはとても感銘をうけました。

毎年夜はたっぷり話をしようと意気込んでいるのですが、お酒も入っていることもあり、年々眠くなる人が増えてきて、今回はこれでお開きになりました。学生時代には友の家で夜通し話し込んだ日のことが懐かしく思い出されました。

２日目は東池袋にある雑司ヶ谷霊園へ行きました。こんなに多くの有名人のお墓があるのは予想もしていませんでした。

夏目漱石のお墓は大きな肘掛け椅子の形をしていました。小泉八雲、泉鏡花、金田一京助、竹久夢二など、その人の個性を想像しながら見て回りました。

近くということで、漱石の「夢十夜」に出てくる護国寺に参拝しました。都心にあることを忘れるような静かなお寺です。

そこには標高７メートルの音羽富士（富士塚）があり、５合目の看板、頂上には浅間神社もありました。もう本当の富士登山は無理でしょうから、この山頂からの意外に良い景色を楽しみました。

お昼には、亡き友が親友と最後に食事をした新丸ビルのバルバッコアでステーキを頂きました。そこには嬉しくも卒業以来初めて会う友が来てくれていました。

来年は兵庫県龍野の友がお世話をしてくれます。

来年も元気で会おうねと再会を誓いお別れしました。いつも会うとあっという間に経ってしまう二日間の旅行です。

（文：田村知子）

文窓会主催　卒業記念ウェルカムパーティー（3月24日）

新入生歓迎ティーパーティー（4月19日）

KOJSP第５期生の修了式（8月7日）

インターナショナルアワー（7月12日）

「あなたにとって文学部で得た最大のものは?」2017年卒業の新人会員アンケートより(抜粋)

■大学内で知り合った学生同士での会話を通じて、生き方、考え方を知ったということです。神大文学部学生だからこその社会の中での立ち位置を共有しながら、友人の学びを自己の学びとして吸収し、より成長していったと思います。人生観という深い話ができました。(米澤ちなつ／芸術学)

■1つの考え方にとらわれない態度、新たなものを吸収し知ろうとする態度が身につきました。元々違う分野を志して入学しましたが、多くの友人や授業、先生方と触れあうことで、それまで考えもしなかった領域に足を踏み入れ、大いに成長することができました。人として成長できる最も良い環境の1つが文学部、人文学だと思っています。答えのない命題に切磋琢磨しながら取り組む中で、広い視野、協調性、探究心を育むことができたと感じています。(平井悠貴／フランス文学)

■どんなことでも、しっかり力を入れたら成果は絶対倍になります。また、文学部できれいな六甲山(の)風景を満足できました。(曲芸／地理学)

■まず、疑ってみる力。メディアやネットをうのみにせず、自分で情報を選び取る力がついたと思います。そして受け入れる力。様々な考え方の人が集まる文学部なので、人の意見をしっかり受け入れられるようになりました。(丸屋杏子／国文学)

■研究室で、先生方や様々な学年の先輩･後輩の方々と言葉を交わせたこと。アットホームな学校･研究室の雰囲気がこの学校の最も良いところだと感じる。(宮崎晴子／美術史)

■美術史学専修だけでなく、国文学･仏文･哲学など多様な専門知識を持つ院生と交流を持てたのが何よりの得たものだった。(岸本達也／美術史学 大学院)

■文学を通して得られるのは、人間がどのようにしたら幸せに生きていけるのかということだと思います。その問いを、様々な視点や価値観から解決していく作業や、自由な考え方を認め合うことの喜びを感じられたように思います。(渡邉実生／英米文学)

東京支部だより

Ⅰ. 今年の文窓会東京支部の総会および木曜会(文窓会主催)は下記内容にて行います。

開催日時 2017年11月9日(木)
文窓会総会:11時30分～(昼食を挟んで)13時30分
木　曜　会:14時～15時30分

演　題 (仮題)「驚きと感動のシェイクスピアは実在したか?
シェイクスピアの魅力とその楽しみ方」

講　師 神戸大学文学部英文科　芦津かおり准教授

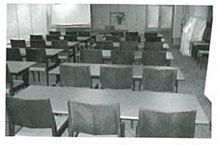
開催場所 神戸大学東京六甲クラブ
〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇(帝国劇場)ビル 地下2階
TEL 03-3211-2916　　FAX 03-3211-3147

会　費 2,000円

文窓会東京支部へのお問い合わせは下記へ　支部長　中野 裕(S36年卒)･副支部長　田中 勉(S46年卒)
事務局:〒223−0064　横浜市港北区下田町1-1-1-113　中野 裕　TEL & FAX:045-561-6317
e-mail: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

Ⅱ. 神戸大学東京六甲クラブへの誘い

東京地区の神戸大出身者のためのクラブ、それが東京六甲クラブです。場所は有楽町、帝劇があるビルの地下2階と環境も足まわりもバツグン!



●アクセス／JR、地下鉄(有楽町線、日比谷線、都営三田線)などでスムーズに行けます。

★★★ 50周年記念･東京六甲クラブがリニューアル!! ★★★
50周年記念寄付金を基に、3月末にリニューアルを行いました。2017年4月3日から装いを新たにしたクラブを是非お気軽にご利用ください。

文窓会(文学部同窓会)――会計報告――

平成28年度収支計算書
(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

【収入の部】

前年度繰越金		¥22,737,792
今年度収入合計		¥3,969,175
	会費納入金	(3,210,000)
	協力金	(659,000)
	受取利息	(34,175)
	行事受取会費	(66,000)
収入合計		¥26,706,967

【支出の部】

事業活動費		¥3,243,782
	会報費	(1,338,165)
	歓送迎会費用	(899,440)
	総会費	(334,884)
	文窓賞費	(336,801)
	ホームページ管理費	(16,892)
	新入生入会記念品	(226,800)
	名簿管理費	(64,800)
	人件費	(26,000)
協力金費		¥830,000
	学友会費	(110,000)
	学術助成費	(650,000)
	活動援助費	(50,000)
	学祭援助費	(20,000)
事務局費		¥798,877
	事務業務委託報酬	(600,000)
	家賃・光熱費	(103,845)
	通信費	(64,339)
	消耗什器備品	(9,810)
	消耗品費	(20,883)
支払手数料		¥30,020
	郵便振替料金	(26,780)
	振込手数料	(3,240)
旅費交通費		¥103,320
会議費		¥95,501
交際接待費		¥172,864
租税公課		¥6,717
今年度支出合計		¥5,281,081
次年度繰越金		¥21,425,886
支出合計		¥26,706,967
(今年度収支)		¥ -1,311,906

平成28年度財産目録
(平成29年3月31日現在)

Ⅰ. 資産の部		¥21,425,886
	現金	(95,420)
	(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
	(みなと銀行) 普通預金	(3,323)
	(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(630,027)
	(ゆうちょ銀行) 振替口座	(1,673,220)
	(みなと銀行) 定期預金	(8,064,784)
	(みなと銀行) 定期預金	(1,006,802)
	(みなと銀行) 定期預金	(1,509,436)
	(ゆうちょ銀行) 定額貯金	(8,442,763)
Ⅱ. 負債の部		¥0
Ⅲ. 正味財産合計		¥21,425,886

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。

平成29年4月19日

会計監査　花木直彦　印
会計監査　河島　真　印

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人たちによる幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。

神戸大学学友会を構成している同窓会:事務局は〈神戸大学企画部社会連携課〉

●文窓会(文学部)　●紫陽会(教育学部・発達科学部・国際文化学部・国際人間科学部)　●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)　●くさの会(理学部)　●社団法人 神緑会(医学部医学科)　●就進会(医学部保健学科)　●社団法人 神戸大学工学振興会KTC(工学部)　●六篠会(農学部)　●海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか
神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。(神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開)
ご入会ご希望の方は TEL 078-851-3433 までご連絡ください。(K・U・C 運営委員　日高　健一)

文窓会ホームページをご利用ください!
卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。いろいろな形での利用が可能ですので利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。kobeuniv.sakamoto@gmail.com(担当:坂本／文窓Web担当、社会学32回生)

文窓会役員(平成28年9月末現在)
会長　武藤美也子　(43年卒･国文学)
<その他の役員>
日高　健一(36年卒･芸術学)　花木　直彦(36年卒･国史学)　三宅　征彦(41年卒･社会学)　田中　賢司(42年卒･社会学)　廣野　幸夫(43年卒･社会学)
吉田　浩次(43年卒･社会学)　西川　京子(44年卒･西洋史学)　田中　睦子(46年卒･芸術学)　坂本　直樹(59年卒･社会学)　田中　康二(63年卒･国文学)
河島　真(H3年卒･国史学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。
http://www.kobe-u.biz/bunsokai/(検索→文窓会)